

[論文]

# アジアの文化的コンテクストにおける エコフェミニスト神学

—— *In God's Image* (1991～2006年) の事例から ——

藤原 佐和子

## はじめに

1973年にネミ（イタリア）で開かれた「人間と環境に関する会議」は、エコロジカルな諸課題への対応における世界教会協議会（World Council of Churches；WCC）の先駆性を示すものとして知られているが、アジア・キリスト教協議会（Christian Conference of Asia；CCA）も、1960年代後半に始まる開発問題への批判的関心から、1970年に「開発のためのアジア・エキュメニカル会議」を東京で開催している。また、「持続可能な開発」の提唱で知られ、全世界がエコロジカルな諸課題への意識を高めるきっかけとなった1992年の国連「地球サミット」以降、1990年のソウル（韓国）においてWCC「正義、平和、被造世界の保全」（JPIC）世界会議、1992年のチェンマイ（タイ）においてCCA「環境と開発に関する会議」が開かれたように、世界およびアジアのキリスト教は、今日の生態学的危機に応答するための様々なフォローアップに挑戦してきた<sup>2</sup>。

しかしながら、日本の人文学・神学研究において女性の視点によるエコフェミニスト神学（ecofeminist theology）は、アメリカのサリー・マクフェイグ（Sallie McFague）、ローズマリー・ラドフォード・リューサー（Rosemary Radford Ruether）をはじめとする西洋のエコフェミニスト神学者たちによる初期の学問的蓄積が参照されるに留まっており、本稿が表題に掲げるアジアの文化的コンテクスト<sup>3</sup>においてエコフェミニスト神学がどのよ

<sup>1</sup> 本稿は、2016年度～2018年度科学研究費助成事業（若手研究B、課題番号16K16712）「非欧米諸国の女性キリスト者による環境倫理への貢献—ラテンアメリカを中心に—」による成果の一部である。

<sup>2</sup> 拙稿『『キリスト者であること』と『エコであること』—エキュメニカルな視座から見たエコ神学—』『福音と世界』2016年1月号（特集：聖書とエコロジー）、新教出版社、3-16頁。

<sup>3</sup> 本稿における「アジアの文化的コンテクスト」には、アジア・キリスト教協議会（CCA）に加盟している国と地域を含む。したがって、オーストラリア、ニュージーランドもこれに含まれる。

うに展開されてきたかについての検討は十分に行われていない。このような事実の背景には、日本のキリスト者たちの目と心が常に西洋に向けられてきたという事実、すなわち、自らの土壌であるところのアジアの文化的コンテキストに対する少なからぬ軽視があると言わなければならない。

1985年、日本において「アジア人自身による初のキリスト教史」と銘打った『アジア・キリスト教史』が出版された。これは、アジア各地のキリスト者たちが自らの文化的コンテキストから注意深く描き出した教会史を、英語から日本語に翻訳したものであり、日本のキリスト者たちのアジアの隣人たちに対する関心の少なさを指しての「知りたいと思わないのは愛が少ないからでしょう<sup>4</sup>」という痛烈な批判の言葉で知られている。それから6年を経て、「我々日本のキリスト教徒は、アジアのキリスト教について、はなはだ無知である<sup>5</sup>」という事実と真剣に向き合い、日本のキリスト者たちによる初めての研究成果が纏められたのが、1991年の日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』であった。奇しくも同年、アジアの女性キリスト者たちによる神学運動の代表的プラットフォームとなってきた *In God's Image* 誌（以下、*IGI*）に初めてエコロジカルな諸課題への言及が見られる。

ラテンアメリカ、アフリカ、アジアといった非西洋の文化的コンテキストに基づくエコフェミニスト神学は、リューサー編 *Women Healing Earth: Third World Women on Ecology, Feminism, and Religion*<sup>6</sup>（1996年）において初めて取り纏められた。アジアからの執筆陣にはインドの哲学者、環境活動家のヴァンダナ・シヴァ（Vandana Shiva）をはじめとする5人が名を連ねている。だが留意しなければならないのは、非西洋のエコフェミニスト神学において最もよく知られるブラジルのイヴォネ・ゲバラ（Ivone Gebara）がその神学の出発点を貧しい女性たちの具体的現実（concrete reality）の内に見定め、「アカデミアや大学やドグマの純粹主義的精神は、具体的な日常生活の一部ではない<sup>7</sup>」と論じている点であろう。

そこで改めて注目されるのが、研究をベースとした学問的、神学的論議だけでなく、信

<sup>4</sup> T・V・シトイ、F・ウクール、S・チャイワン、Z・モウ著『アジア・キリスト教史〈2〉—フィリピン・インドネシア・タイ・ビルマ—』教文館、1985年、4頁。引用文は中嶋正昭による。

<sup>5</sup> 日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』、日本基督教団出版局、1991年、3頁。

<sup>6</sup> Rosemary Radford Ruether, *Women Healing Earth: Third World Women on Ecology, Feminism, and Religion*, OrbisBooks, 1999. Vandana Shiva, Aruna Gnanadason, Gabriele Dietrich, Victoria Tauli-Corpuz, Sun Ai Lee-Park の5名が執筆している。

<sup>7</sup> Ivone Gebara, *Longing for Running Water: Ecofeminism and Liberation*, Fortress Press, 1999, p. 191. 拙稿「ラテンアメリカのエコフェミニスト神学とイヴォネ・ゲバラ」『基督教研究』80巻1号（2018年）、39-58頁を参照。

徒の女性たちにとって分かりやすい、日常生活にかかわる読み物を掲載してきた *IGI* (1982年創刊) であり、そこにおいて、アジアの文化的コンテクストを反映させたエコフェミニスト神学がどのように展開されてきたかを検討することである<sup>8</sup>。本稿では、① エコフェミニスト的視座による論放が登場し始める 1990 年代、② 「エコフェミニズム」が特集される 2000 年、③ 自然災害の頻発を背景に「神の庭をケアする」と題する特集が組まれる 2006 年までを、アジアにおけるエコフェミニスト神学の萌芽期と捉えて検討し、*Women Healing Earth* においては把握されなかった考察や取り組みを掘り起こすことにより、今後の研究、教育、礼拝実践のための手がかりを見出したい。

## I アジアにおけるエコフェミニスト神学の萌芽期 (1990 年代)

アジアのエキュメニカル運動においてエコへの取り組みが始められた背景には、① 1960 年代後半に始まる開発問題への関心、② 1990 年にソウルで開かれた WCC の JPIC (正義、平和、被造世界の保全) 世界会議、③ 1992 年の「地球サミット」がある。「アジアの女性たちの神学」と密接な関係にある CCA においても、1992 年のチェンマイで「環境と開発に関する会議」が開かれ、「アジア祈祷日」(Asia Sunday) のテーマには「神の創造へのケア」(Caring for God's Creation) が選ばれた。以下においては、1990 年代の *IGI* にどのようにエコフェミニスト的視座が登場し始めたのかについて見ていきたい。

### I-1 1990 年代初頭

*IGI* において最も早くエコロジカルな諸課題に言及したのは、CCA 女性委員会のメンバーであった韓国のパク・ヨンスン (Yong Soon Park) による 1991 年の論放 “Justice, Peace, and the Integrity of Creation” である。パクによれば、見境のない開発の結果として危機に瀕している「生態系のサイクル」(ecological cycle) もまた、JPIC に含まれる重要な課題である。パクは、米国の化学系複合企業デュポンによる塩素ガス漏れ問題 (1986 年) を韓国の事例として示し、公害産業が開発途上国に押し付けられている現状を批判している<sup>9</sup>。

これに続くのが、1993 年春号に掲載されたインドのステラ・ファリア (Stella Faria) による詩 “In the Partnership with the Creator” だが、より明確にエコフェミニズム神学の萌

<sup>8</sup> Hope S. Antone, “My Joys and Jolts in Working with In God's Image,” *IGI*, Vol. 18, No. 1, 1999, pp. 41.

<sup>9</sup> Young Sook Park, “Justice, Peace and the Integrity of Creation: Justice & Peace (Life) Movement and Korean Women,” *IGI*, Vol. 10, No. 1, 1991 (Spring), p. 42.

芽を示しているのは、インドのガブリエレ・ディートリヒ（Gabriele Dietrich）による論攷“Emerging Feminist and Ecological Concerns in Asia”である<sup>10</sup>。これによれば、1991年にニューデリーで開かれた「南アジアの女性と開発」ワークショップにおいて、「家父長制」（patriarchy）はカースト、階級によるヒエラルキー、国家、宗教、植民地主義、人種、エスニシティ、さらには環境破壊をも含む権力構造として理解された<sup>11</sup>。土、風、火、水といったエレメント（基本要素）に着眼し、「フェミニストでエコロジカルな願いを養う共通の感覚が、様々なアジア文化において見出される<sup>12</sup>」と強く感じるディートリヒは、「女性性」（feminine）の理想化をやめること、原子力エネルギー、火力発電所、巨大なダム建設といった破壊的な選択肢に反対することなどを取り組むべき課題として列挙している<sup>13</sup>。

1993年秋号では、フィリピンのヴィクトリア・タウリ・コープス（Victoria Tauli-Corpuz）がルソン島北部コルディレラの先住民イゴロットの霊性について執筆している<sup>14</sup>。カンカナイ族の聖公会司祭を父に持つ彼女は、イゴロットの霊性を異教（paganism）以外の何ものでもなく、キリスト教化されるべきものだと思われてきたが、宣教師たちがイフガオ族の持つ「男女の農神」を焼き尽くすように要求し、消失させた例をはじめとするキリスト教と土着のアニミズムの対立関係を振り返る中で、自らの視点の偏狭さに気付かされていく。

タウリ・コープスによれば、イゴロットの女性たちは宇宙それ自体を生きているもの、霊を持つものと信じ、農耕のサイクルに合わせた儀礼や日常生活を通じて自然との互惠関係を経験してきたが、1960年代以降の開発によって1990年代には様々な変化に直面しているという。例えば、かつてイゴロットの間では女性に対する暴力はタブー視され、「共同体の問題」として対処されてきたが、1990年代にはアルコール依存症の男性による暴力が増加するばかりか、キリスト教の影響力の色濃い共同体においては「プライベートな問題」として見放されるようになった<sup>15</sup>。さらには、現金収入の重視から、田畑を酷使して過剰な生産が行われるようになり、民兵組織「カフグ」のヘリコプターから弾丸や爆弾

<sup>10</sup> Gabriele Dietrich, “Emerging Feminist and Ecological Concerns in Asia,” *IGI*, Vol. 12, No. 1, 1993 (Spring), p. 31.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 34. ワークショップでは、シヴァが「女性と自然は親密に関係しており、それらの支配と解放も同様につながっている。したがって、女性運動とエコロジー運動は一つのものであり、家父長主義的な負の開発（maldevelopment）に対するカウンター・働きである」と発言している。

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 35.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 40.

<sup>14</sup> Victoria Tauli-Corpuz, “Reclaiming the Earth-based Spirituality of Indigenous Women in the Cordilleras,” *IGI*, Vol. 12, No. 3, 1993 (Autumn), p. 5.

<sup>15</sup> *Ibid.*, pp. 8-9. かつてレイビストは村を追放されるか、非常に重い罰金を科せられた。

が落下する危険性から、女性たちが農作業を恐れるようになるなど、女性たちの日常生活と自然が大きく引き離されつつあることが指摘されている<sup>16</sup>。

### I-2 1990年代半ば

イゴロットに限らず、広くアジアの人々が地球を「生きた体」(a living body)と捉えてきたと論じるのが、1995年秋号に掲載された韓国のヨム・ハングク(Han Kuk Yeum)による“Jubilee and Ecofeminist Theology”である<sup>17</sup>。風水学の伝統から、かつては韓国の人々も地球を「生きた人間」(a living person)と信じてきたが、ダム建設などの開発が進行すると、山から蛇が降りてきたり、濃霧によって交通事故が頻発したり、呼吸器、関節、神経の病気に苦しむ人々が現れるようになった。こうして韓国教会協議会(NCCK)は1995年を「ヨベルの年」と宣言したが、重要なのは、「主のための安息をその土地にも与えなさい」(レビ25:2)という言葉、資源の平等な分かち合いをはじめとするエコロジカルな視点から解釈することである。ヨムによれば、韓国のフェミニスト神学者たちは教会の人間中心主義的を批判し、傷付いた地球の健康の回復や、被造物との連帯を訴えているという。

続く1996年春号では、インドのタラ・テワリ(Tara Tewari)が“Nature’s Wonders”という詩の中で、木々や花々の楽しげなざわめきが荒地に広がりゆく様相を描きながら、このような被造世界を、「責任を持ってケアするのは誰なのか」と問いかけている<sup>18</sup>。ファリアやテワリの例に見られるように、1990年代半ばにはエコフェミニスト的視座が従来の学問的、神学的論考だけでなく、詩(あるいは散文)の形式で表現され始めていることが分かる。

### I-3 1990年代末

1999年に台湾のナンシー・ツーメイ・チェン(Nancy Tzu-Mei Chen; 陳慈美)が執筆した“A Mother and the Ecological Movement”には、環境学やエコロジーを学んだことのない女性がエコフェミニスト的視座に目覚めていく様子が描かれている<sup>19</sup>。1950年代から

<sup>16</sup> 1990年にCitizen Armed Force Geographical Units(CAFGU)と改称して創設された。

<sup>17</sup> Han Kuk Yeum, “Jubilee and Ecofeminist Theology,” *IGI*, Vol. 14, No. 3, 1995 (Autumn), p. 18. ヨムはマクフェイグ、リユースー、エリザベル・モルトマン・ヴェンデル(Elisabeth Moltman Wendel)による西洋のエコフェミニスト神学を紹介しながら、女性原理が充満している共同体のシンボルとしての「乳と蜜の流れる地」(モルトマン・ヴェンデル)と風水学の可能性に言及した。

<sup>18</sup> Tara Tewari, “Nature’s Wonders,” *IGI*, Vol. 15, No. 1, 1996 Spring, p. 4.

<sup>19</sup> Nancy Tzu-Mei Chen, “A Mother and the Ecological Movement,” *IGI*, Vol. 18, No. 2, 1999, p. 18.

1990年代までの「台湾の奇跡」と呼ばれる急速な経済成長の裏には、森林伐採、公害、水質汚染、工業や農業における化学薬品の使用、原子力事故の危険性など、数多くの危機的状況が生じたが、草の根の環境運動が急成長していく一方、教会は沈黙を貫いてきた。

チェンは大学で3年間教えた後に母親業に専念するようになってから、初めて殺虫剤、食品添加物、大気汚染に対して問題意識を持つようになり、主婦たちの環境保護グループに参加し始める。「環境教育やエコテクノロジーが変化を生み出すような文化的コンテキストを作り出すためには、宗教的言説が貢献しうる<sup>20)</sup>」と確信した彼女は、成人の日曜学校向けハンドブック“Good Stewardship for the Environment”を編集し、1992年には、環境問題にかかわる包括的なキリスト教教育に向けて「台湾生態神學中心」(Taiwan Christian Ecological Center)を設立する。教材やカリキュラムの作成、関連資料の中国語翻訳、講師の派遣、国内外の環境保護グループとの連携などの働きにより、台湾基督長老教会はエコへの取り組みが最も活発な教会となったことや、このネットワークが、①人間を自然の支配者ではなく、生態系の一部に位置付ける大地の倫理<sup>21)</sup>(land ethics)を学ぶこと、②環境的正義(eco-justice)の追求、③シンプルライフの実践に継続的に取り組んでいることなどが報告された<sup>22)</sup>。このようにチェンの例においては、エコフェミニスト的視座が自らの文化的コンテキストにおける具体的実践にまで昇華されている。

## II 「女性、エコロジー、エコフェミニズム」(2000年)

アジア各地がインド、パキスタンによる核実験(1998年)の脅威に晒されたミレニアムには、2000年9月号で「女性、エコロジー、エコフェミニズム」が特集された。以下においては、インドのマーガレット・シャンティ(Margaret Shanthi)、日本の一色義子(Yoshiko Isshiki)による論攷、香港のウォン・メイ・ヨク(Wong Mei Yuk)による詩に加えて、ニュージーランドのキャサリン・ウッド(Catherine Wood)によって創作されたエコフェミニスト的視座による初めての「リタジー」を取り上げてみたい。

<sup>20)</sup> Ibid., p. 18.

<sup>21)</sup> アルド・レオポルド(Aldo Leopold)が1949年の『野生のうたが聞こえる』において提唱した概念で、環境倫理学の原点とされる。

<sup>22)</sup> Ibid., p. 19. チェンはジョン・B・カブ・Jr.(John B. Cobb Jr.)が言うように、神学には二つのタスクがあると説明する。それは、①信仰のあり方を変え、キリスト者がどのようにこの世界を理解するかを変えるタスク、②新しい理解を他の分野と批判的に突き合わせて、公に議論するタスクである。

## II-1 エコフェミニズムの2つの立場

シャンティは、巻頭の“Eco-Feminism : An Update”で、エコフェミニズムの二つの立場を解説している<sup>23</sup>。彼女によれば、自然派のエコフェミニストは、女性と自然が「命の担い手」としての自然な結びつきを持つと主張し、家父長制が過小評価してきた「女性性」、自然、身体、感情の再評価を通して、女性と自然との霊的な関係性を築こうとする<sup>24</sup>。アジアの文化的コンテクストにおける具体例としては、古代インドのすべての男神と女神を創造したのが女神アディティであることや（リグ・ヴェーダ）、朝鮮神話における貪欲かつ暴力的な肉食者が男神である一方、農業労働者として地道に働き、穀物や果物を集めて人間を守るのが女神であることが紹介されている。

これに対して、社会派のエコフェミニストは、霊的側面よりも社会的、経済的、政治的側面を重視し、エコフェミニズムを正義や解放のための働きと不可分であると考え、女性と自然の関係を「抑圧され、搾取されてきた者たち」と見なす。例えば、インド北部のチプロ運動では、女性たちが集団で木々を「抱擁する」（ヒンディー語で「チプロ」）ことによって、開発の名のもとに行われる森林伐採に命をかけて抵抗している。この論攷でシャンティは、命の網の目（web of life）において「私たちが互いにつながり合っている」という感覚を高め、地球の再生と人間らしい共同体のための預言者的な働きを行うべきだと論じている。

## II-2 日本における具体的実践

2000年には、日本の女性キリスト者による初めての論攷も確認できる。エコフェミニズムの要点を、神の愛と平和の内に共に生きることと考える一色義子は、二つの世界大戦を振り返り、平和こそ私たちが最も求めるものであると論じる<sup>25</sup>。先進国が主導する戦後の開発事業によって、水、空気、エネルギー、環境は大いに破壊されたので、21世紀においてはさらなる環境汚染や「富士山の半分に満たない」と警告される石油資源の枯渇による戦争勃発が危惧されているのである。

<sup>23</sup> Margaret Shanthi, “Eco-Feminism : An Update,” *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, p. 2.

<sup>24</sup> 西洋のエコフェミニスト神学では、例えば、アン・プリマヴェシ（Anne Primavesi）が月経サイクルと月の満ち欠け、潮の満ち引きを関係づけて、女性と自然は共に「命の担い手」とあると考える。だが例えば、森を奪われた女性たちが長い距離を歩いて水や燃料を手に入れなければならないのは、生活環境の維持が「女性の仕事」として割り当てられていることの反映に過ぎないとも言える。一方で、エコ・スピリチュアリティ（eco-spirituality）についてはサリー・マクフェイグを紹介するに留まった。

<sup>25</sup> Yoshiko Isshiki, “Eco-Feminism in the 21st Century,” *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, p. 27.

彼女によれば、20世紀の女性たちは戦争に「否」と言う力を持たなかったが、21世紀の「女性たちが閉じられた個人家庭に留まらずに外で生きようになれば、この世界そのものが彼女たちのオイコス（家）<sup>26</sup>」となり、自らの意見をオープンに表明することができるようになる。エコフェミニズムが未来のための「分かち合い」（sharing）の必要性を指し示していると考察する一色は、神が私たちにキリストを与えるという最大の「分かち合い」を行われたように、私たち自身も「実際的な活動<sup>27</sup>」としてそれを行うようにと招いている。彼女はこの論放で、日本キリスト教婦人矯風会が1986年に始めたアジアの女性たちのシェルター（House in Emergency of Love and Peace；女性の家 HELP）という具体的実践を紹介し、ほんの少し違う人々と「私たちが心を、時間を、エネルギーを、知識を、力を、他者への愛を分かち合いさえすれば、この世界はすべての人々にとってもっと幸せな場所になる<sup>28</sup>」と訴えた。

### II-3 エコフェミニスト的視座による「リタジー」

2000年9月号には、3篇の詩が掲載されている。なかでも注目に値するのは、香港中文大学で神学を学び、ハーグで「女性と開発」を学んだアーティストのウォン・メイ・ヨク（Wong Mei Yuk）による“My Mother in Heaven”（天にまします私の母）である。彼女は、暴力をもたらす「軍人のような、父なる神は必要ない」と切り捨て、たった一人の人間の値打ちをも知り、私たちの感情を深く思いやる「母なる神」を、より親密で信頼できる神のイメージとして描いている<sup>29</sup>。全文を日本語に訳すると、以下のようになる。

天にまします私の母、  
父性はあなたの恵みを抑えつけるだけ  
母なる神と呼ぶことは  
人と神の距離を近くする

軍人のような、父なる神は必要ない  
戦争について学んだから  
男らしさにはもううんざり

<sup>26</sup> Ibid., p. 27.

<sup>27</sup> Ibid., p. 29.

<sup>28</sup> Idem.

<sup>29</sup> Wong Mei Yuk, “My Mother in Heaven,” *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, p. 46.

結果は常に暴力だから！

私たちの紛争を解決するために  
もっと洗練された方法を持ってないのか？  
なぜ銃を持たなければならないの  
撃ったり殺したりするために

あなたは一人の母として  
命をケアし、大切にする方法を知っている  
私たちの気持ちをほんとうに理解し  
私たちの感情をもっと深く思いやる  
あなたの母性は、父なるイメージと比べるべくもない

あなたは命を生み出す  
あなたはイヴの母  
私たちの母の母  
たった一人の人間の値打ちを知っている  
たった一人の人間が失われ、殺されただけでも、あなたは嘆く

私が絶望していると  
あなたの慰めがそばにある  
私の嘆きと苦しみは  
あなたの悲しみと痛み

また、エコフェミニスト的視座による初めてのリタジー“Ritual of the Elements”には、土、風、火、水のエレメントや、果物が象徴的に用いられるだけでなく、バングラデシュ、スリランカなどにおいて国際キリスト教奉仕団とアオテアロア・ニュージーランド教会協議会（CCANZ）が支援している様々な具体的実践が織り込まれている。地球や人間以外の被造物とのつながりが常に養われていくことが願い求められ、以下のような、四季折々の祈りが創作された。

地球の力が祝福されますように。私たちは感謝します。希望と種まきにいざなう春の暖かさに、命と共に踊るように誘う夏の活気に、収穫を呼び入れる秋の誠実さに、私たちが休ませ安心させる冬の静けさに。私たちがあなたに根付くものでありますように<sup>30</sup>。

### III 「神の庭をケアする」(2006年)

アジア各地が数多くの自然災害に見舞われたことを受けて、2006年9月号の主題は「神の庭をケアする」(Caring for God's Garden)とされた。「炎の輪」と呼ばれる環太平洋火山帯に位置し、2004年にスマトラ沖地震と津波、2006年にジャワ島中部地震とムラピ山の噴火を経験したインドネシアから寄せられた論攷には、世界最大のムスリム人口を擁する国に生きる宗教文化的の少数者である女性キリスト者たちが、ローカルの文化をどのように見つめているかを読み取ることができる。また、興味深いことに、*IGI* 編集責任者でフィリピンの神学者のホープ・S・アントン (Hope S. Antone) も、スマトラ沖地震と津波、2005年前後のチェンマイ (タイ) での洪水をきっかけに、自らエコフェミニスト的視座による二つの論攷を執筆している。

#### III-1 スマトラ沖地震と大津波 (2004年)

スマトラ沖地震で壊滅的な打撃を受けたアチェ州については、被災地支援を行うインタン・ダルマワティ (Intan Darmawati) が自作の「アルピジェラ」を添えて報告している<sup>31</sup>。「アルピジェラ」とは、チリにおいて軍政期の女性たちの悲しみや苦しみの表現手段として発達した手縫いのタペストリーであり、ダルマワティは自然災害の被害の際して、これを用いている (左が津波、右が噴火の様子である)。



<sup>30</sup> Catherine Wood, "Ritual of the Elements," *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, pp. 48-52.

<sup>31</sup> Intan Darmawati, "The Arpilleras and Some Thoughts," *IGI*, Vol. 25, No. 3, September 2006, p. 53. 著者は KAIL (Kuncup Padang Ilalang) を創立した。州人口の 80% がアチェ人とされる。

ダルマワティによれば、多くの女性たちが津波から逃げ遅れて亡くなったのは、アチエの文化において、彼女たちが自分のことよりも子どもや家を優先して考えるよう教えられたり、急いで避難しようにも、走ったり泳いだりする訓練を受けていなかったためだという。被災した人々は災害の原因を様々に憶測するが、なかでも目立ったのは、インドネシア軍が聖なる墓で「酒を飲んだから」「(婚外の) 情事が行われたから」などの噂で、中には「女性たちがヒジャブを着用しなかったから」というものまであった。

共通しているのは、津波は人々が神に対して不従順であったことによる「神の怒り」の結果だという考え方であり、被災地の復興に当たり、イスラーム法(シャリーア)がより厳格化されることになった。ヒジャブを着用しない女性たちは、宗教警察によって毎週金曜日に州都最大のモスクの前で鞭打ち刑に処せられ、ムフリム(夫、息子、父、兄弟など)を伴わない外出も禁じられた。自然災害の最中にもそれ以後にも、集中的な被害を被るのは女性たちであるというのが、ダルマワティの考えである。

### III-2 ジャワ中部地震と火山の噴火(2006年)

2年後のジャワ中部地震については、ジョグジャカルタの活動家アウグスティン・プラセティヨ・モルニアティ(Agustine Prasetyo Murniati)が巻頭の論攷で報告している。ムラピ山の火山活動が活発化した際、政府は住民たちに避難を呼びかけたが、人々は普段通りの生活を送り、夜になると、溶岩が流れ出す美しい光景を見物する者も少なくなかった<sup>32</sup>。地震と噴火から3日間、家の外にテントを張って寝泊まりした彼女の家族は、毎晩のように「諸宗教の感謝の祈り」(interfaith thanksgiving prayer)を献げ、食事を分かち合うと、それは次第にスラマタン(*selamatan*)と呼ばれるジャワ人に伝統的な神人共食の儀礼となっていく。

被災から5日が経つと、モルニアティは支援活動として心に傷を負った女性たちの語りに耳を傾けていく。ある女性は家の柱の下敷きになった夫を助け出して背負い、2キロ先の丘まで避難したが、夫はすでに死んでいた。衝撃のあまり涙も出なかったが、彼女はすぐに「隣人たちを助けなければ」と思い、イスラーム法に従って多くの遺体を洗い、埋葬していく。西洋からやって来た宣教師の影響により、しばしば個人主義的に陥るキリスト教とは対照的に、「私たちの子どもたち、親たち、夫たち、妻たちを失いました」と語るこの女性は、危機的状況に共同体として向き合っているのである。

<sup>32</sup> Agustine Prasetyo Murniati, "Caring for the Beauty of Creation in the Garden of God," *IGI*, Vol. 25, No. 3, September 2006, p. 2.

このような経験を通してダルマワティは、キリスト者のアイデンティティに留まりつつ、ジャワ人の伝統的価値観に心を開くようになる<sup>33</sup>。ジャワの人生哲学では、あらゆる経験は神の御心から離れることがないので、幸福な時も悲しみの時も、喜び過ぎたり、悲しみ過ぎたりする必要はない。誕生と死、病と回復、そして成功だけでなく失敗においてさえ、人々はシュクル・アルハムドゥリラ（神様、ありがとう）と言うのである。このようにしてダルマワティは、家族を養うため、勇敢にも生産活動を再開させていく被災女性たちの姿を証言した。

### III-3 「逆創造」とチェンマイの洪水

これらの災害をきっかけに、*IGI*を編集するアントンも私たちが自然とのつながりや共同体の意識を確実に失っていることに気付かされ、地球温暖化による影響が深刻化する今日にこそ、創造物語における「支配せよ」との神の命令を利用や搾取の特権ではなく、多様性に満ちた神の被造世界を守る責任と理解する「スチュワードシップ」(stewardship)が必要であると考えられるようになる<sup>34</sup>。

観光地化のためにマングローブの木々を伐採していたビーチでは、津波による大きな被害が発生したが、タイやミャンマーのモーケン族のような家船で暮らす海上生活者たちは、引き波を見たら高台に逃げるといった言い伝えに従って、生き延びることができた。私たちは今日、自然をコントロールし、操作する知識を持っているという誤った考えを持ちやすいが、自然にこそ学ぶべきものが多くある。アントンは、自然とのつながりは取り戻されなければならないと述べて、読者にも課題の共有を呼びかけている。

そのための刺激的なヒントとして提供されたのが、フィリピン合同教会に残る作者不詳の詩「逆創造」(Reverse Creation)である。これは「初めに、神は天地を創造された……神は言われた。『光あれ』こうして、光があった」にはじまる物語を反転させたもので、人間が「闇あれ」と言って闇を創造し、悪徳の限りを尽くす破壊の物語である。全文を日本語に訳すると、以下のようになる<sup>35</sup>。

<sup>33</sup> Ibid., p. 5.

<sup>34</sup> Hope S. Antone, "Affirming Our Stewardship of God's World," *IGI*, Vol. 25, No. 3, September 2006, p. 38. CCA, WCC 共催「あらゆる暴力を克服するための十年」アジア会合の開会礼拝にて分かち合われた。ある時、学校で(米国での)奴隷制について聞いてきた6歳の息子に「なぜ神様はみんなを同じように(肌の色や外見)造らなかったの?」と問われたアントンは、庭に一種類の色の花しかなかったらどうだろうと問い返し、「神様はたくさんの種類、たくさんの色彩や香りを持った植物や生き物たちのいる庭をお望みになったと思う」と答える。

<sup>35</sup> Ibid., pp. 40-41. *The Hymnal of a Faith Journey* (フィリピン合同教会)より引用された。

終わりに、人は地球と呼ばれた天を破壊された。

人の霊が動いてすべてを破壊するまで、地球は美しかった。

人々は言われた。「闇あれ」こうして、闇があった。

人々は闇を好み、闇を「安全」と呼んだ。

それから人々は、自らを人種、宗教、階級、性別に分け隔てた。

夕べはなく、朝もなかった。終わりの日から七日前のことである。

人々は言われた。我々を支配する強い政府あれ。

我々は巧みに、効率良く互いを殺すことを学べるように、

我々の身体をコントロールする軍隊あれ。

人々は言われた。迅速に簡単に殺せるように、ロケットと爆弾あれ。

より徹底するために、ガス室と炉で満ちよ。

夕べはなく、朝もなかった。終わりの日から五日前のことである。

人々は言われた。ドラッグその他の逃避あれ。

絶え間ない苛立ち、心の平穏を乱す現実のゆえに。

夕べはなく、朝もなかった。終わりの日から四日前のことである。

人々は言われた。国々の間に分断あれ。

共通の敵が誰なのか分かるように。

夕べはなく、朝もなかった。終わりの日から三日前のことである。

人々は言われた。我々に似せて、神を造ろう。

他の神を私たちと競い合わせよう。

我々が考えるように、神は考えると言おう。

我々が憎むものを憎み、殺すものを殺すように。

夕べはなく、朝もなかった。終わりの日から二日前のことである。

「終わり」の日、大きな地鳴りが地球の面（おもて）を襲った。

炎が美しい地球を焼き尽くし、「静けさ」だけが残った。  
黒焦げの地球は今、安息し、一人の真なる神を礼拝する。

そして神は、人々がなしたすべてのことを御覧になった。  
燃えかすのくすぶる廃墟の数々、静けさの中で、  
「神は泣いた」。

二つ目の論攷は、CCA 事務局の移転（2005 年）の前後に、チェンマイにおいて繰り返して発生した洪水をきっかけに書かれたものである。洪水の原因には、アンダマン海からやって来るモンスーンによる長雨や、ドイ・ステープ山からの表面流水が指摘されていた。しかし、地元の住民たちや市民団体は、タクシン・チナワット元首相の肝いりで建設された観光施設「ナイトサファリ」などの大規模な開発事業による周辺環境や水流の改変を非難する<sup>36</sup>。責められるべきは自然それ自体ではなく、人間の業だというのである。

振り返ってみれば、13 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのランナー・タイ王朝時代以来、チェンマイの歴史には洪水がつきものであった。メングライ王は、ピン川の西の高台に都（現在の旧市街）を築き、四方を掘で囲んで、煉瓦と土の壁で守ってきたように、ランナーの人々は洪水と共に生きてきた<sup>37</sup>。地元の住民たちも水やボートで遊んだ子ども時代を回想し、「かつては水がとても綺麗で、洪水はむしろ楽しいものだった」と語るのである。

しかし、今や水は濁っており、ゴミが排水口に詰まるので道路の水はけは悪い。そこで行政が提案したのが、ピン川に高さ 2 メートルの堤防を 2 キロにわたって建設する計画だが、地元の住民たちは、さらなる開発によって自らの生活風景と愛着あるピン川が分離され、「北方の薔薇」と呼ばれるチェンマイが現在のバンコク（過去に「東洋のヴェニス」と呼ばれていた）のように混雑し、汚染された都市になってしまうことを恐れて、これに反対している。アジアのエキュメニカル運動の新たな拠点であるチェンマイにおいても、環境に無関心な開発パラダイムと、環境と結びついて生活しようとする伝統的価値観は激しく衝突しているのである。

二つの論攷においてアントンが最も問題視していると思われるのは、津波や洪水を人間の不信仰に対する「神の怒り」や「神の罰」と考えるような洪水物語（創世記）の安易な

<sup>36</sup> Hope S. Anyone, "Of Floods and Sustainable Communities," *IGI*, Vol. 25, No. 3, September 2006, p. 43.

<sup>37</sup> Antone, op. cit., p. 43. <http://www.thenotsoinnocentsabroad.com/blog/a-brief-history-of-chiang-mai>, accessed on September 9, 2018. 高床式住居、用水路、点在する湖や沼地も、水をピン川に戻したり、街に溢れさせないために有効利用される。

神学化が、アジア各地でしばしば行われたという事実である。

極めて安易な（そしてチープな）神学は、いくらかの人々に対して災害を説明するのに役立つかもしれないが、妥当であったり、論理的であったりするようには思われないし、すべての人々を助け、解放するものでは決してない<sup>38</sup>。

さらには、自然災害からの奇跡的な生存者や、運良く被災しなかった人々について、「選び」や「選民」に対する神の祝福に関係づけるような語りも行われた。アントンは、キリスト教以外の宗教に属する人々を不当に非難したり、自らの信仰的なグループにのみ特権を与えたりする安易な神学化を厳しく批判し、聖書における「選び」や「選民」の概念から受け取るべきは「特権ではなく責任、人々と『光と塩』を分かち合う責任<sup>39</sup>」のメッセージであると指摘している。

#### III-4 詩、リタジー、そして「賛美歌」

2000年の同号には、EASY Net. (Ecumenical Asia Pacific Students and Youth Network) の地域コーディネーターであるフィリピンのグレンダ・ロカス (Glenda Rocas) が創作した詩とリタジーが掲載されている。若い母親の視点による詩“Homeless Butterflies”には、タイ最高峰のドイ・インタノンで出会う美しい蝶たちの姿が、利益を最優先する開発事業の展開によって失われていく様子が描かれる。全文を日本語に訳すると、以下のようになる<sup>40</sup>。

摩天楼の真ん中で  
 あなたを見つけられるとは思えない  
 生きようと決めたこの街で  
 あなたが私を見捨てたから  
 最後に会ったのはいつ？  
 最後に会わせてくれたのはいつ？  
 あなたを手のひらで感じるために

<sup>38</sup> Idem.

<sup>39</sup> Idem.

<sup>40</sup> Glenda Rocas, “Homeless Butterflies,” *IGI*, Vol. 23, No. 3, September 2006, pp. 55-56.

長く抱擁を焦がれてきた  
 今私は見知らぬ土地にいて  
 木々の緑の葉の真ん中で  
 焼け付くような青空の真ん中で  
 ドイ・インタノンの草と乾いた葉っぱの間で  
 歎びに胸が高鳴る  
 あなたをもう一度見つけた  
 あなたの黄色く、青く  
 白く、黒いストライプ  
 蝶たちと戯れに舞っている  
 鳥や虫の友達の鳴き声と  
 木々のざわめきが聞こえる  
 川のさざめきが聞こえる  
 ああ、私の子どもたちが  
 あなたの色とりどりの美しさを見られたらよかった  
 あなたの友達の美しい声が聞けたらよかった  
 悲しいけれど、  
 力ある人たちが森を壊している  
 地球の豊かさを過剰に切り倒し、過剰に掘り返し  
 廃棄物で川を汚していく  
 「利益」の名のもとに  
 あなたたち小さな蝶たちを  
 住むところから追いやられ、見捨てられたものにする

ロカスによるリタジー “A Liturgy for Reclaiming Our Responsibility to the Earth” は、「私たちが自然とつながることを学び、地球に対する私たちの責任を示すことができますように」との祈りに始まり、香を炊いて、アジア各地において洪水で亡くなった 228,000 人の死を悼むものである。また、家を追われた 350 万人の中国の人々、熱波で亡くなった 1,000 人のインドの人々 (2002 年)、大型台風によって亡くなった 200 人の日本の人々 (2004 年)、壊滅的な干ばつによって農地を失ったタイの人々など、広くアジアの人々の喪失に寄り添

う交読文も創作されている<sup>41</sup>。

このリタジーは、神の被造世界をケアする「スチュワード」としての新たな出発のしるしとして、植物の種が用いられたり、CCA 賛美歌集 *Sound the Bamboo* (2000 年) から「あなたの庭をケアさせ、地球を讃えさせて下さい」という歌詞をリフレインさせる“Honor the Earth” (地球を讃える) が選曲されたりしている点も特徴的である。全文を日本語に訳すると、以下ようになる<sup>42</sup>。

巡りゆく宇宙の神  
 最も小さな種の神、私たちの命の源  
 この美しい場所はあなたの贈り物  
 あなたの庭をケアさせ、地球を敬わせてください

無関心と貪欲と粗野は、私たちの欲ぶかさ  
 この庭がもたらす豊かさを奪い取り  
 良きものを打ち捨て、必要なものを忘れます  
 あなたの庭をケアさせ、地球を敬わせてください

森や川は壊されて、死に絶え  
 泥に至るまで土は荒らされて  
 鳥の歌は消され、海は使い尽くされます  
 あなたの庭をケアさせ、地球を敬わせてください

美しさがあるように、空気があるように  
 平和の香りが、恐怖に侵されています  
 汚染と戦争の蔓延から自由になりますように  
 あなたの庭をケアさせ、地球を敬わせてください

命は聖なるもの、命はすべて

<sup>41</sup> Glenda Rocas, “A Liturgy for Reclaiming Our Responsibility to the Earth,” *IGI*, Vol. 23, No. 3, pp. 59-64.

<sup>42</sup> Christian Conference of Asia, *Sound the Bamboo: CCA Hymnal 2000*, Christian Conference of Asia, 2000.

すべての生き物をつなぎ合せ、私たちに祝福する  
 体と魂を結び合わせる  
 あなたの庭をケアさせ、地球を敬わせてください

なお、*Sound the Bamboo* にはこの他にも、台湾の男性牧師でアジア教会音楽の分野における指導者的存在として知られるイトー・ロー (I-to Loh; 駱維道) らによって、「正義、平和、被造世界の保全」(JPIC) に連なる CCA 賛美歌が 14 篇収録されている。

### おわりに

本稿では、第一に、エコフェミニスト的視座による論攷が登場し始める 1990 年代に注目した。そこでは、見境のない開発事業の展開によって、アジア各地の人々の生活が自然から引き離されていく状況が批判的に顧みられていた点、エコフェミニスト的視座が詩や散文として、また、環境意識の高いキリスト教教育のためのネットワーク形成という具体的実践として表れている点を確認した。

第二に、「エコフェミニズム」が初めて特集された 2000 年には、アジアの文化的コンテキストに見出されるエコフェミニスト的要素が再評価されたり、自然破壊に対する女性たち独自の抵抗運動が展開されたりしている点や、地球の力が祝福され、私たちが地球とつながって生きることを祈り求めるリタジーが新たに登場している点について見た。

第三に、自然災害の頻発を背景に「神の庭をケアする」と題する特集が組まれた 2006 年では、地震、津波、火山の噴火による被災地の様子が新たにアルピジェラを用いて表現され、個人ではなく共同体として現実に向き合う女性たちの姿が報告された点、*IGI* 編集責任者が自らチェンマイで経験した洪水について考察し、自然災害にかかわる聖書の物語の安易な神学化を批判した点、アジア各地の被災者たちを悼むリタジーが創作された点などを確認した。

以上のことから、1990 年代から 2006 年までの萌芽期においてアジアの文化的コンテキストにおけるエコフェミニスト神学が、学問的、神学的論攷としてだけではなく、詩や散文、リタジー、アルピジェラ、賛美歌など、様々な形式を用いて表現されてきた点を理解することができる<sup>43</sup>。また、かねてからエコロジカルな諸課題に関心があったわけではなく、具体的な生活経験を通してエコフェミニスト的視座を培ってきたチェンやアントンは、

<sup>43</sup> 一方で、エコロジカルな諸課題に関する世界初の諸宗教間会議として 1997 年に京都で開かれた「気候変動—アジアにおける持続可能な開発への挑戦—」についての報告は確認できなかった。

*Women Healing Earth* においては把握されていなかった例であると言える<sup>44</sup>。ここから、チェンによる「台湾生態神学中心」の1998年以降の後継団体「生態關懷者協會」(Taiwan Ecological Stewardship Association)や、アントンによる「エキュメニカル教育」の取り組みに、エコフェミニストの視座がどのように反映されていくかについてのさらなる研究の展望が見えてきたほか、ある人にとっては受け入れやすく、またある人にとっては容易には受け入れがたい「神の被造世界へのケア」に参加するための宗教的感受性が、もっぱら西洋の神学研究から輸入される学問的蓄積によって養われるのではないことも分かってきた。

このように、アジアの文化的コンテキストにおけるエコフェミニスト神学を学問的営みとしてだけでなく、より包括的な信仰運動として理解するとき、「天にまします私の母」や「逆創造」のような詩や、*Sound the Bamboo* に収録されているアジアの多様な文化的コンテキストから生まれた賛美歌を、研究だけでなく教育や礼拝実践の場において分かち合うことの可能性も見えてくる。例えば、キリスト教主義大学において、このような方法で若い人々とエコロジカルな宗教的感受性を共に育てていくことは、私たちがアジアの隣人たちと出合わせ、多様な文化に対する関心や親しみ、相互理解、連帯の感覚をもたらすという点において、エキュメニカル・フォーメーションの実践にもつながっていく<sup>45</sup>。この意味でアジアのエコフェミニスト神学は、私たちが「スチュワード」として神の被造世界をケアする責任を果たしていくための、さらには、アジアの隣人たちに対する愛なき無関心を乗り越えるための学び豊かなリソースにもなりうるであろう。

### 主要参考文献

- Antone, Hope S. "Affirming Our Stewardship of God's World," *IGI*, Vol. 25, No. 3, September 2006, pp. 38-41.
- . "Of Floods and Sustainable Communities," *IGI*, Vol. 25, No. 3, September 2006, pp. 42-52.
- Chen, Nancy Tzu-Mei. "A Mother and the Ecological Movement," *IGI*, Vol. 18, No. 2, 1999, pp.

<sup>44</sup> 今後の研究では、アジアにおけるエコフェミニスト神学的実践の先駆的事例として、1998年以降の後継団体である「生態關懷者協會」(Taiwan Ecological Stewardship Association)に関する現地調査の可能性を模索していきたい。

<sup>45</sup> 拙稿「『福音主義』とエキュメニカル運動における教育的実践—エキュメニカル・フォーメーションとは何か」、佐藤司郎・吉田新編『福音とは何か—聖書の福音から福音主義へ』教文館、2018年、280-309頁を参照。

- 18-19.
- Conradie, Ernst M. 2012. *Creation and Salvation : A Companion on Recent Theological Movements*, LIT Verlag.
- Darmawati, Intan. "The Arpilleras and Some Thoughts," *IGI*, Vol 25, No 3, September 2006, pp. 53-54.
- Dietrich, Gabriele. "Emerging Feminist and Ecological Concerns in Asia," *IGI*, Vol 12, No. 1, 1993 (Spring), pp. 31-42.
- Eaton, Heather. 2005. *Introducing Ecofeminist Theologies*, T&T Clark International.
- Eaton, Heather. Lorentzen, Lois Ann (eds.) 2003. *Ecofeminism and Globalization : Exploring Culture, Context, and Religion*, Rowman & Littlefield Publishers.
- Gebara, Ivone. *Longing for Running Water*, Fortress Press, 1999.
- Ho, Wan-Li. *Ecofamilism : Women, Religion, and Environmental Protection in Taiwan*, Three Pines Press, 2016.
- Isshiki, Yoshiko. "Eco-Feminism in the 21st Century," *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, pp. 27-30.
- Murniati, Agustine Prasetyo. "Caring for the Beauty of Creation in the Garden of God," *IGI*, Vol. 25, No. 3, September 2006, pp. 2-13.
- Nadeau, Denise. "Suffering Bodies : Asian Migrant Women in Canada : A Call to Eco-Feminist Jubilee," *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, pp. 10-14.
- Park, Young Sook. "Justice, Peace and the Integrity of Creation : Justice & Peace (Life) Movement and Korean Women," *IGI*, Vol. 10, No. 1, 1991 (Spring), pp. 41-49.
- Rocas, Glenda. "Homeless Butterflies," *IGI*, Vol 25, No 3, September 2006, pp. 55-56.
- . "A Liturgy for Reclaiming Our Responsibility to the Earth," *IGI*, Vol 25, No 3, September 2006, pp. 59-64.
- Ruether, Rosemary Radford. 1975. *New Woman, New Earth : Sexist Ideologies and Human Liberation*, Seabury Press.
- . 1993. *Gaia & God : An Ecofeminist Theology of Earth Healing*, SCM Press Ltd.
- (ed.) 1996. *Women Healing Earth : Third World Women on Ecology, Feminism, and Religion*, Orbis Books.
- . 2005. *Integrating Ecofeminism, Globalization, and World Religions*, Rowman & Littlefield Publishers.

- Shanthi, Margaret. "Eco-Feminism : An Update," *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, pp. 2-9.
- Tauli-Corpuz, Victoria. "Reclaiming the Earth-based Spirituality of Indigenous Women in the Cordilleras," *IGI*, Vol. 12, No. 3, 1993 (Autumn), pp. 5-10.
- Wong, Mei Yuk. "My Mother in Heaven," *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, p. 46.
- Wood, Catherine. "Rituals of the Elements," *IGI*, Vol. 19, No. 3, September 2000, pp. 48-52.
- Yeum, Han Kuk. "Jubilee and Ecofeminist Theology," *IGI*, Vol. 14, No. 3, 1995 (Autumn), pp. 18-22.